

# ボスニア調査体験記

岡田 絵美

2009年の8月から9月にかけてトルコ、ボスニア、東南アジアにおいて、イスラムと非暴力についてのフィールドワークを行った。中でもボスニアでの一ヶ月の滞在は調査期間の大半を占め、ここではその体験を綴りたい。調査の内容や学問的なことはさておき、ボスニアという国とその人々への私の印象を書くに留めることにする。

ボスニアに行くのは初めてではなかった。2006年3月にベオグラードを訪問するついでに3日くらいサラエボに寄ったことがある。そのため、今回の調査は全く新鮮な目でボスニアを見つめるものではないが、真新しい体験にはない継続の視点を、2006年のサラエボ旅行は少しばかり可能にしてくれたのではないかと思う。おそらく3年前にサラエボに魅惑されたことも、またボスニアに行ってみよう、という動機に繋がったのだろう。

サラエボのオールドタウンはとにかくチャーミングである。両側に昔なじみの店が並ぶ狭い道は、丸石で舗装されており、そのでこぼこ道を数週間行き来した私の靴とサンダルは、帰るころにはぐったりとしていた。オールドタウン（バスチャーシャ）とそのオスマン帝国風の雰囲気は、でこぼこ道が途絶えるまで続き、さらに先にはオーストリア・ハンガリー帝国時代の建築と近現代の建物が見られた。サラエボの町を端から端まで歩いてみると、まるで歴史ミュージアムを探検してい

るようである。

私のすり減った靴底がその証であったように、サラエボで一番時間を過ごしたのがバスチャーシャであった。そこで宿をとり、食事をし、インタビューの多くもその周辺で行った。これほど濃い彩りをもった場所を紙に生かすことには無理がある。銅細工師がカーンカーンと作業しボスニア特有の銅製品を並べる店、そのような銅製品に強いトルコ風のコーヒーを注ぎ、砂糖漬けの菓子と水煙草を客に勧める喫茶店、多色ガラス製品やさらにカラフルなショールを披露する小売店、あちらこちらに誘惑を仕掛けてくるジェラート屋さんや無頓着に煙を吐くチェヴァピ(ケバップ)屋、町空にミナレットを奮い掲げるモスクと、その近くに自らの威厳を負けないように主張するカトリック教会、正教会、シナゴグ……この町と、この町が通りがかりの人に訴えかける何かは、やはり直接行って経験してほしい。宗教学の学生ならなおさらである。

2006年と去年の訪問の際、サラエボに漂う空気は弾んでいて、言い表せない意気込みさえ感じ取れた。政治的不満や失業やインフレがないというわけではないのだが、何か新しい状態に向かおうと奮い立たせているエネルギーが、町の心を明るくしていたように思えた。今回のフィールドワークで分かったのが、現在サラエボにおいて平和構築に尽力している人の大半がボスニアの戦争を直接経験した

者ではなく、戦争中は他へ避難し、戦後故郷に戻って国の再建のために働いている人達であるということだった。私がインタビューした人の多くは、戦争を経験した同国人の気力と信頼感の喪失を補うかのごとく、曇りのない表情と真直ぐな目で質問に答えてくれた。再建の原動力はこういう人達が中心になっているようであった。

前向きな空気が流れるなか、戦争の余韻は建物の弾丸の痕や、会話の時折の異様な転換に日常的にうかがわれた。この町では、「サラエボ・ローズ」というものが道路のどこどころに見かけられるが、それは迫撃砲弾の跡を赤い樹脂で埋めバラのような模様を作った地面上のマークである。戦争中、迫撃砲で死んだ人への追悼である。毎日私が町に向かうために歩いた道でも、散り開いた薔薇が目を引いた。ある時、宿泊先まで車で送り返してくれていたムスリーマが、途中の道路の渋滞のなかで運転席から指で線を示し、そこから先はセルビア人の包囲が始まったところであり、その建物はムスリムの拠点で、すぐそこは戦いの中心地だったと教えてくれた。その説明がなかったら、ただの整備が足りていない大きめの通りにしか見えていなかったのだから……

戦争を経験したボスニア人の話も聞くことができたが、直接戦争に触れていない人へのインタビューとは、やはり対照的だった。その違いは言っていることの内容よりも、態度に現れた。戦争を見てきた人たちは簡単には笑顔を見せず、その表情には警戒の兆しが時々あらわれた。無理もない、近所同士での殺し合いがあったところだ。EU国民でもない私は、彼らにとって「他者」よりさらに外の存在だろう。インタビューの時の彼らの顔はとても真剣で、発言の一つ一つに重みと真実味があった。パーソナルな話も語ってくれて

決して悪いもてなしではなかったが、この人達から真の信頼を得るには時間がかかるだろうという気がした。

ある夜、バスチャーシャで晩御飯を食べていたところ、どういうわけでサラエボに来たのか、と近くで食べていた男から不意に聞かれた。色々喋っている内に、ボスニアの戦後の平和活動を把握するには、戦争のことも理解しなければ、という話になった。「しかし君、戦争のことは研究者に分かりはしないさ。ここにいた俺たちにだって理解できないのだから。ほんの昨日まで親しく付き合っていた友達や近所の人が、宗教や名前が違うからって、今日は武器を取って攻めて来るんだぞ。しかも、彼らとは何十年来の知り合いだというのに。そんなこと誰が理解できるって言うんだ」。いったい何故そこまで過酷な戦いが起こったのか、という謎をめぐる声が多く、現地の人の発言にこだましていた。

ボスニアを含むバルカン半島の人々は、ユーモアをよく解する民族である。例えば、長距離バスのチケットは通常窓口で購入することになっているが、遅れてきた私はバスの運転手に、「私の鞆はvrloへヴィーなの。お願い、チケットをバスのなかで買わせて。Molim vas!」と大きめに手を合わせて請うと、その英語とボスニア語交じりの様子をおかしがって、「さあ、はやく乗たまえ」と笑いながらチケット販売のルールを曲げてくれた。またある時ボスニアの携帯電話にクレジットを加えようと、サラエボで通い続けた日用雑貨店へテレフォン・カードを買いに行った。その店主はカードの番号を私に教えるときに、英語の3、4、5を間違えていたので、「違う、違う。3はthreeで、4はfourで、5はfive」と彼女に説明すると、自らの間違いか私の拙いボスニア語をさぞ可笑しく思ったのか、長く笑っていた。彼女は通常あまり微

笑まなかったのだが、それからは親しくなり、通り過ぎるたびに挨拶をするようになった。明らかに外国人に見える私が少しでも向こうの言葉を口にすると、ボスニア人は最初びっくりするが、その後は快く歓迎してくれる。

丸一ヶ月サラエボに滞在したわけではない。ムスリムとクロアチア人が多いモスターにも何日か調査に行き、その後はさらに南の、現在はセルビア人が主に住むトレビニエという町にも赴いた。モスターの雰囲気はサラエボと全く違っていた。全体的に戦争が残した傷をサラエボより強く伝える場所であった。終戦から15年経つにもかかわらず、多くの建物は修復されておらず、多数の銃弾の跡が今も見られる。サラエボは首都であるだけにヨーロッパからの投資や旅行者の流入の影響がうかがわれるが、モスターは停滞と脱力と偏狭を感じさせる町だった。また、人々の目もサラエボの住民より猜疑心を浮かべているように思えた。ある夕方、宿泊の周りの住宅地を歩いていたときに、ティーンエイジャーのグループにばったり会ったが、女の子の一人は思ったことをとさに口にしたりしたのか、私を見て「Kineskinja（中国人）」と言った。それは親しい好奇心の言葉でもなく、しかしからかいの言葉でもなく、ただひと気の少ない住宅地で私にばったり会って驚いて発した言葉であった。中国人でないということを伝えたが、私にとっては不快な経験であった。不快であったのは他国人と間違われたことではなく、もし私がボスニア在住の中国人であったのなら（実際バルカン半島の華僑の人口は増えつつある）、そのような過剰な人種認識をベースにしたやり取りを日常強いられるということが分かったからである。モスターのある大通りは、今日ムスリムとクロアチア人住民を分ける「見えないライン」として機能しているそうである。モスターの橋は和解の象

徴として戦後建て直されたが、民族同士の心をつなぐ橋はまだできていないとは思えない。

サラエボからモスター、モスターからトレビニエへと旅する途中の景色は目覚ましい。大きく開いた崖壁と峡谷には息を呑んだし、植生の変化も興味を引いた。サラエボでは、リンゴや梨の木が豊富に生えていたが、南に行くにつれ地中海の地勢に変わっていき、オリーブやイチジクの木が多くなった。トレビニエに行くことになったのは、少し意外な成り行きだった。3年前にサラエボからベオグラードへの夜行バスの中であるスーフィーに出会ったのだが、彼の両親がトレビニエに住んでおり、その家に招かれた。セルビア人正教徒として生まれ、20代の頃ヒンズー系の宗教に入りインドで何年か修行し、その後イギリスで修行を続けている内にスーフィズムに出会い、最終的にはスーフィーになったという身の上話を、彼は夜行バスの中で何時間もして私の睡魔を追い払ったのだった。いつもはサラエボでアメリカ人の奥さんと二人で暮らしているのだが、夏は両親のトレビニエの家に行き、セルビアとイギリスに住む娘たちを呼んで一緒に過ごすらしい。非常に国際的な家族なのだが、彼の両親は典型的なセルビア人といった感じの人たちだった。私は周りの木の新鮮なイチジクをたくさん摘み、家の畑でとれたパプリカやトマトやジャガイモと一緒に料理を作り、それを町の人が作ったチーズとともにご馳走になった。トレビニエは夜空が綺麗な平和なところだった。戦時、ムスリムとクロアチア人はこの町を出て行くことを余儀なくされたのだが、戦いがほとんど無かったということは、町の健全な表情に反映されている。

「ここにいる人々は、飾り気無く、土地に近い生き方をしている。殆どの食べ物を自分で植え、収穫し、町で買うものも手作りの品

が多い。実際、ここでは殆どお金を使わない暮らしができる。全部土地が恵んでくれるから。長年海外で修行をしてきたが、本当に魂にいいのは、手で働くことと、土地の近くで住むことなんだ。それは親がずっとやってきたことだったと言うのに……」はるか遠い国で求めていた宗教性を結局は自分の故郷で見つけたと、このスーフィーは語った。「まあ、一つ不平を言わせてもらえば、ここの人たちは少し考えが閉鎖的だということか。あまりよそ者を好かない」。私はその時、ユーゴスラビアのそれぞれの民族が戦いで何を必死に守ろうとしていたのか少し分かったような気がした。思わず「伝統とコミュニティをしっかり持ちながら、外の世界にも手を伸ばせればいいのに……」と言ったが、「パラダイスにしかありえないさ」と笑って返されてしまった。

私はトレビニエを後にし、一日だけクロアチアのドゥブロヴニクの歴史ある街と青い透明な海を見に行き、それからサラエボに戻って調査を続けた。顧みると長い旅をしたという感じがする。多くのことを目にし耳にしたが、それが消化しきれていないという満腹感がいまだにある。消化というのは意味づけの作業のことだが、この体験記ではありのままの印象と感想を書くことに努めた。解釈を控えた率直な記録として、それはそれで書き残す意味を感じる。今、転換期にあるボスニアは、今後どうなるのだろうか。ユーゴスラビアのミニチュアとして再形成するのか。多数派ムスリムのアイデンティティを妥協させることなくEUの一部になるのか。それとも、それぞれ互いに距離を置きたがる民族共同体がぎこちなく並存する有様がこのまま続くのか。ボスニアの将来を他人事に思えないのは何故だろうか。おそらくこの小さな国が、面積の規模からはとても想像できないほど大き

なことを、世界に語りかけているからであろう。